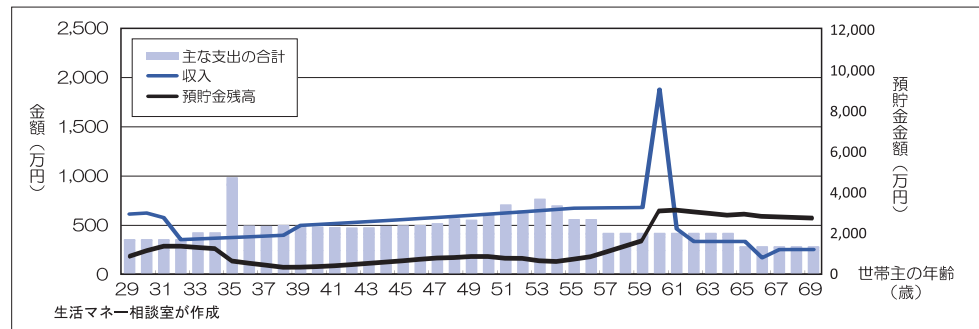


●ケース2のキャッシュフローと預貯金残高の推移（例）



② **出産後に妻が退職・マイホームは購入のケース**

**出**産後に妻が退職すると夫の収入にもよるが、子どもに手がからなくなる小学校入学〜高学年になる頃からパート勤めを始めるケースが多い。年収は100万円に抑える方が多いのが現状だが、今後の税・社会保障の改革により変化はあるかもしれない。子どもが高校生、大学生になると、最も家計がひっ迫する傾向がある。長い人生における、いわゆる「使い時」だ。家計によっては数年赤字が続くことも珍しくない。ただし、子どもが経済的に独立すれば、リタイア後に備えた最後の「貯め時」がやってくる。妻がパート勤めであれば比較的に日中に時間の余裕があるものの、夫婦共働きに比べるとどうしても資金の余裕は減る。ここは夫の収入次第で余裕度合いは変わる。①と同様に住宅ローン提案とリタイア前が接点を持つチャンスだが、日頃時間もあるので、積立の提案も関心を引きやすいだろう。

**取引深耕のために押さえておきたい**

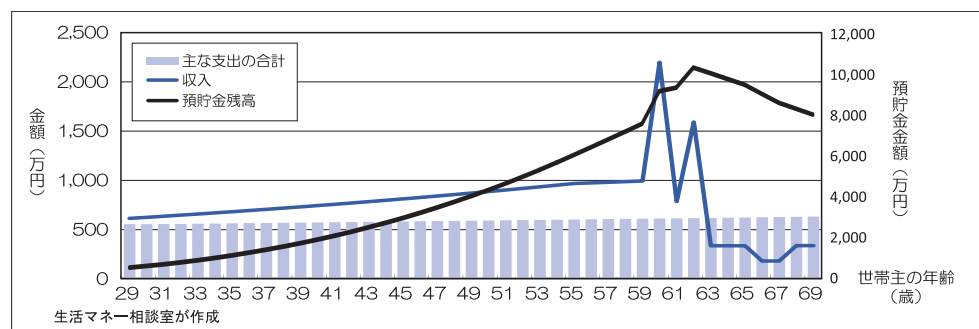
# 共働き世帯の家計収支&貯蓄額の変動シミュレーション

八ツ井慶子 生活マネー相談室 CFP®

子どもや住宅購入の有無が異なる共働き世帯のキャッシュフロー表を挙げ、各家計の特徴を解説する。比較対象として、妻が専業主婦の家計も紹介しているので参考にしてほしい。



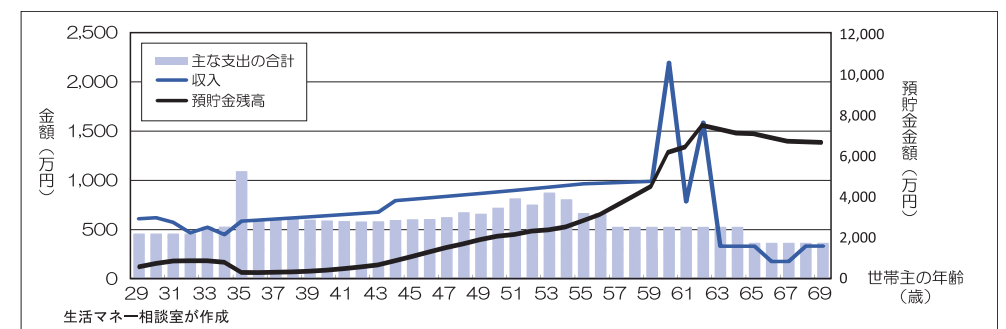
●ケース3のキャッシュフローと預貯金残高の推移（例）



③ **生涯共働き・子どもなし・マイホームは賃貸のケース**

**こ**の家計はシングルのCF表と似ている。大きなライフイベントがなければ毎年の支出額の変動は激しくなく、基本的に現役の間の収支は常にプラスの「貯め時」が続く。そのため、どんな勤定に陥りやすいのが特徴だ。これは夫婦共働き家計に共通する特徴でもあるが、子どもがいない場合、家計のメリハリが少ないためか、よりその傾向が強い。ペットの飼育費や月の生活費、旅行費、被服費、趣味などに投じるお金が多いのも特徴。リタイア前後に住宅購入を検討する場合もある。また、妻が年下で年齢差がある場合、妻が一人となった後の介護を気にしがちだ。子どもに頼れない分、介護保険や高齢期の住まいに関心が高い。家計はリスクを取りやすいため運用は勧めやすいが、個人の性格上リスクを受け入れられることが前提となる。提案時のヒアリングが大事であることに変わりない。

●ケース1のキャッシュフローと預貯金残高の推移（例）



① **生涯共働き・子どもあり・マイホームは購入のケース**

**生**涯共働きの場合、基本的に資金は潤沢である。通常、現役の間の収支はプラスとなる。ただし、気になるのは子どもが生まれてすぐの時期。産休・育休で妻の収入が減ることに加え、高い保育料が家計を直撃する。私はこの時期を「プチ貧乏期」と呼んでいる。第二子の出産が続けば、さらにプチ貧乏期は長期化する。加えて、育休明けすぐにフルタイムで働くのは難しいことから、最近では「時短勤務」が増えている。この時短が終了してようやく再び収支にゆとりが生まれる。ここまで戻るのに、子どもが生まれてから10年以上かかるだろう。こうした家計は、お金はあっても時間がない。そんな中でも住宅ローンを組むときには相談に時間をかけるもの。住宅ローンの取引をきっかけに、深掘りできることが理想だろう。子どもの教育費にメドがたつ頃には、自分自身の資金について考え始める。